
かいなに擁かれて～あるピアニストの物語～ 序章

ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かいなに擁かれて〜あるピアニストの物語〜 序章

【Nコード】

N7947I

【作者名】

ヒロ

【あらすじ】

スタインウェイと共に生きる無名のピアニスト魅華。

幼いころから始めたピアノ。

そしてその前からずっと視えるモノ。

聞きたくないモノ。

視たくないモノ。

彼女には、あまりにも多く ―届きすぎる。

様々な男たちが彼女を通り過ぎてゆく。

モーツアルトピアノソナタ第8番イ短調K310
魂を揺り動かす旋律に天上から一条の光が射しこんだ……

序章

かいなに擁かれて

〈あるピアノリストの物語〉

〈序章〉

予約が入っていたその日の鑑定を全て終わると、魅華はぐったりした。

携帯の時刻をみると、午後八時を過ぎていた。

コンビニで買ったサンドイッチを、朝早くにほんの少し、口にしなければだから何か食べなくてはと思うけれど、今何かを口にしてもすぐに吐いてしまうことは分かり切っていた。

せめてお茶でも飲もうかと考えたが、すぐにその気力も失せた。詰めた鑑定を済ませた日の夜は決まって吐き気に襲われる。

いつものことだ。

あれからもう七年も経ったのだなと、魅華は天井を見上げた。

彼女は思う。

この仕事はやりたくても出来る仕事じゃない。けれどやりたくてやっているわけでもない。ただ、今は辞めることができないだけだ。本来ならピアノだけで身を立てていけたのかも知れない。

オンナを武器にして、その気になれば幾らでもチャンスはあった。だけど、言っまい。

これが、ワタシの人生だ。

今日も様々な人生を背負った人たちの話を訊いた。

そして背負いモノの全てをその人たちはこの部屋に置いて帰る。

そのモノ達の中には何日も時には数カ月もこの部屋に居憑くことがある。

今日居憑いたモノはそう易々とは去ってくれそうにないことを魅華は覚悟した。

かなり重い。

こうやって、決して裕福とは言えないけれど、生活が何とか出来るほど、今に至るとは思わなかった。

離婚を二度も経験した。二度目のその時はキツかった。

<占い師>

世間では、マヤカシだとかインチキだとか、中には霊感商法だとか、酷い時には詐欺紛いに非難されたこともあった。だけど、自分にはほんとうに否応なしに視えてしまうのだからどうしようもないのだ。望んで得た体質なんかじゃない。何かに必要とされただけだ。かつて近所の心ない人たちには、この家に入りする男たちの姿を認めては、まるで淫らなことをしているかのように、有りもしないようなことを井戸端会議のネタにされたこともあった。

ワタシの鑑定を望んで来てくれたお客さんなのに、しかも男性のお客さんは信頼のおける友人から頼まれた人たちなのに……。ワタシは淫らなオンナなんかじゃない。軽く生きられたとしたら、どれほどラクか。

「ワタシだって、寂しいよ。誰かとずっとずっと一緒に暖かく暮らしたい。だけど、それは望むまい。ワタシには半分だけの幸せがちようどいい」

広いこの家の中にとった独りであることを魅華は噛みしめる。

この家は女が独りで暮らすだけには不必要に広い。

山麓の閑静な住宅街に洒落た今風の家が多く建ち並ぶ中で、ここだけが戦前の古いアルバムから切り抜いたような木造の平屋の家だった。

ただ単に、生活をするためだけならこんな広さは必要なかった。

奥行がニメール七十センチを超えるスタインウェイのフルコンソートグランドピアノ。

フレームにも金属が使われていない、全て木製の1867年パリで万国博覧会が催された頃に創られたこのピアノ。

このピアノ、このピアノだけは、どんなことがあっても守り続け

てきた。

何の後ろ盾もない、無名のピアニストである女独りの力が、如何に無力であることを嫌になるくらい思い知らされた。

部屋を探すにしても、ピアノを置ける広い部屋を借りるのに必要な家賃のおおよその見当はついた。けれど、そんな家賃なんて到底魅華には払えなかった。

ピアノさえ置くことが出来る部屋ならどんなところだってかまわない。

祈るように縋りつく思いで手当たりしだい形振り構わず、数え切れないくらい不動産業者へ足を運んだ。けれど、想像した通り、魅華が毎月払えそうな金額ではどの物件にも手が届かなかった。

訪れた不動産業者の中には、魅華の話などろくに聞きもせず迷惑そうに、まるで厄介者をあしらうような仕打ちを受けたことも何度もあった。

彼からは期日を決められて、『早くピアノを何とかしろ』と迫られた。

公営住宅に身を寄せて暮らす両親のもとにピアノを置ける余裕など有りはしない。それよりも、二度目の離婚になることを、魅華は、全ての整理がつくまでは父母には話したくないと強く思った。

彼と義父母には自分の持てる全てを注ぎ尽くしていたつもりだったのに、まるで遊び飽きた玩具を不用品として処分するように一方的に言い渡された　離婚。

自分の生活のことを考えれば当然に訴える手段もいくらかでもあったのだろう。けれど、当時の魅華にはその気力さえ失せていた。離婚後のピアノのことすら頭に浮かばなかった。

来る日も来る日も祈り縋るように不動産業者を巡った。けれど、見つからない。

友人や音楽仲間に相談と協力を願うことも何度も考えたが、それすら魅華には出来なかった。一度目の離婚の後、心を病みどうしようもない鬱の暗闇の中を何年もさ迷っていた魅華に、みんなは、こ

の上ない ほど暖かく支えてくれた。あの時、その支えがなかったらきつと生きてゆけなかつただろう。

もう二度と結婚なんて、しないと思っていたのに。それなのに。

彼は魅華がさらに酷く深く暗闇に落ちてゆこうとするとき、いつも絶妙のタイミングで暖かく優しくそこから魅華を引き上げてくれた。鬱の暗闇の中に魅華は一条の光を見た。その光を辿り、伸ばした手の先に彼の温かい柔らかかな手があった。

『魅華、今度こそ本当に幸せになりなよ！ そうでないと私たち絶対に許さないからね！ ほんとうに、おめでとう』みんなは心から祝福してくれた。嬉しくて涙がとまらなかつた。

それなのに、

歳月は、人の心をも変えてしまうものなのか。

それとも天は、魅華が誰かと寄り添うことを、拒み続けるのか。

あれほど自分を励まし支えてくれたみんなに、言いたくても全ての整理を終えるまでは言えない。と魅華は思った。

期日が迫り、過ぎようとしていた。

だけど、見つからない。どうしようもない。もう彼に話す以外に他はない。

魅華が形振り構わず、祈るように縋りついて頼んでも、どれだけ必死になって探しても得ることが出来なかった事を彼はいとも簡単に離婚の一切を承諾することと引き替えに、彼はピアノの移送とこの家を魅華に用意した。魅華は無名なピアニストである女独りの自分の無力さを、短く切り整えた爪が手のひらに食い込む痛みと、唇が千切れ奥歯が砕けるような思いを噛みしめた。

全ての整理を終えた魅華は、両親へ報告のために実家に帰った。

『パパ、お母さん、元気だった？ あのね、ごめんなさい、ワタシ

彼と、離れたの』

父母は驚き肩をつなだれた、ひとり娘の不憫さを嘆き悲しんだ。

りりいーん　しゃりりりーん　りりいひいひいーん
りりいーん　しゃりりりーん　りりいひいひいーん
りりいーん　しゃりりりーん　りりいひいひいーん

『すず、むし……』

山間の谷の駅にほど近い、この公営住宅の原っぱに一切の蒼が消えて、そこにある命をも阻むかのように寒々しくなつたというのに、それでも、そんななかでも小さな命を燃やし渾身の力を振り絞りながら老いさらばえた自らの羽を重ね合わせ、たった一匹だけになるうとも、すずむしは、消え入りそうな音色を奏でている。

『もう、心配はしないで、ワタシは、もう、大丈夫だから。昔みた
いには　ならない』

『ピアノと伴に独り暮らす。と、いう娘を父母は自分たちの傍におきたかった。けれど、魅華は頑なにそれを拒んだ。』

母が何かを言おうとしたが、父は母の手に、その手を添えてそれを制した。

魅華は母に添えられた父の手をじつと見つめた。

幼い頃、自分を抱き上げてくれた大きくって遅しかった父の手が、こんなにも薄く小さくなっていたことにはじめて気付いた。魅華は堪らなくなって父の手を自分の両手で包んだ。胸が苦しくなってもう声はでなかった。

幼かった頃から始めたピアノ　。

そしてその前からずっと視える　モノ。

裕福で何ひとつ不自由のなかった幼少期。

邪気に満ちた輩に陥れられて奈落の底へ落ちてゆくしかなかった父。

突然に見舞われた不運にそれまでと逆転した生活となろうとした時も、父はピアノだけは、ワタシのために全てを投げ売って命を掛けてスタインウェイを残してくれた。

そして母は、ワタシがピアノを断念し諦めることを許しはしなかった。

だから大学へ大学院にまでも進学させてくれた。

音大時代に教授から才能を認められて留学の薦めもあった。

今は著名な音楽家となつて成功している学生時代の友人も多い。

だけど、叶わなかった。置かれた環境がそれを許容しなかった。後悔などない。

まして、誰を恨むこともない。今もこうやってワタシにはピアノがあるのだから。

魅華が今、何とか独りでも生活が送れるようになったのは、彼女のおかげがえのない友人たちや音楽仲間の応援があったからだ。みんなが支え導いてくれたのだ。

古くからの友人たちは彼女のそれをよく知っていた。占い師としてその力を仕事に結び付けたらどうだ、と提言してくれたのもその友人たちだった。友人のひとり、天然石を扱うアクセサリーショップのオーナーと親しかった。早速その友人はオーナーに連絡をとった。

するとオーナーは店の宣伝にもなり、イメージアップと売り上げにも繋がるを考え、土日と祝日を店の鑑定日に定め、演奏の仕事と重なる時は、平日に鑑定日をシフトすることを条件として、店の片隅にその場所を提供してくれた。

音楽仲間たちは、自分たちの持ち得る全ての人脈を屈指して以前に増して、魅華にピアノ伴奏の仕事をまわしてくれた。彼女自身も結婚式や様々なイベントでのピアノ伴奏の仕事を執った。

そうして、鑑定とのスケジュールをうまく調整しながら真心を込めて旋律を奏で続けた。

あれから七年、決して裕福などではないが、何とか独りの生活を維持できるようにまでなった。友人や音楽仲間、みんなのお陰だ。感謝。そして、父母に 感謝。

魅華は、音楽仲間のコンサートやリサイタルにピアノ奏者として幾度も共演した。

けれど、自身でソロのコンサートを主宰したことはまだ一度として無かった。

明日も友人のヴァイオリンのリサイタルに共演することになっている。

気持ちは友情の占める方が多い。だけど、共演は生活の為だ。

ソロコンサート。

無名のピアニストである自分が主宰しコンサートを開催するとなると意味は全く違う。自分の集大成としてのピアノを発表する場を創り出すということなのだから。

重い焦りが魅華を覆う。

ピアニストとして年齢的にも既に自分の限界を感じ始めているからだ。

いや 年齢でない。最近、ふと自分で満足できるような指の動きが出来ないと違和感を感じ取るときがあるのだ。その変化は恐らく相当なレベルの音楽家でも気づくことは難しいほどの極微細なものにしか過ぎなかった。

しかし、そのことが魅華を焦らせていた。

魅華は自分の両手をじっと見つめた。

綺麗に飾った爪なんてない。

短く切り整えられた爪。ピアノを弾くための 手だ。

「よく頑張る手だね」と魅華は、自分に云ってみた。

今こうやってオンナ独りで歩いてゆけるのは、友人たちや音楽仲間、みんなのお陰だ。感謝。そして、父母に 感謝。

その思いがあるからこそ魅華は強く想う。

ワタシのピアノ 集大成としてのソロコンサートを開催しなければと。

強く想った時だった。

何かがパチンと音をたてた。

そして確信したのだった。「あ、明日、出逢ってしまっ」
その確信は、翌日、現実の事となった。

〜次章へつづく〜

序章（後書き）

ゆるりと筆を執りたく思います。
どうぞ宜しくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7947i/>

かいなに擁かれて～あるピアニストの物語～ 序章

2011年10月6日05時48分発行